

Changes in the Lives and Behaviors of Preschool Children due to the COVID-19 Pandemic—From observation records at the nursery field

WATANABE Kanae

Abstract

The purpose of this study was to examine the influence of the COVID-19 pandemic on the life of children in early childhood in nursery based on the qualitative analysis of the observation record of 2-year-old children maintained by nursery teachers. The results show that children's life and activity in the nursery were different before and during COVID-19 pandemic. Before the pandemic, children went out of the nursery, walked to parks, and played with friends actively and cheerfully. After returning to the nursery, the children played continuously or drew pictures of fun experiences they had outdoors. There existed a continuity and relationship between the activities outside and inside the nursery, and the children engaged in them voluntarily because they wanted to do them. Even during the COVID-19 pandemic, the children were given opportunities to go outside. However, the play and activities were mainly walking, observing nature, and singing individually. In the nursery, children played in the narrow playground or indoors in small groups, but there was no continuity or relationship between each activity. Furthermore, many of the activities were set by nursery teachers and some were concerned with elementary school study curriculum. The COVID-19 pandemic has also affected younger children, but this was due to changes in the childcare content provided by nursery teachers. The care style shifted from fostering interpersonal relationships, independence, and self-direction through play to giving children instructions and allowing for individual activities, and parents welcomed them, especially when they were concerned about studies in elementary school. Regardless of public health or social issues, nursery teachers and parents may

determine the strengths and negative impacts of the COVID-19 pandemic on early childhood.

新型コロナウイルス感染症のパンデミックによる園児の生活・行動の変容 ～保育現場での観察記録に基づく検証～

渡 部 かなえ

1. 緒言

2019年に中国の武漢で最初の患者の発生が報告された新型コロナウイルス感染症（以下、コロナ）は世界中に広がり¹⁾、日本もコロナの感染拡大（パンデミック）に巻き込まれた。コロナ・パンデミックによる混乱と深刻な影響は子どもたちにも及び、2020年3月2日に全国の学校に臨時休校の要請がなされ²⁾、春休み終了後も、緊急事態宣言が4月7日に7都道府県に発出されて、17日には全国に拡大されたために休校措置が延長され、多くの子どもたちは5月末まで登校することができず、6月以降も多くの学校で分散登校や短縮授業が実施され³⁾、子どもたちの生活や学びもコロナによって大きく変えられてしまった。学童・生徒だけでなく、園児もまた、コロナの影響を受けた。幼稚園は学校に準じて休園となったところが多かったが、保育所に子どもを通わせている保護者は就業しており、特にエッセンシャル・ワーカーの場合は社会基盤を維持していくために仕事を休むわけにはいかなかったため、学校や幼稚園が休校・休園となっていた期間も保育園児の中には登園していた子どもがおり、保育関係者はコロナ・パンデミックの様々な危険や影響から子どもたちを守り・見守りながら保育を行っていた。

本研究は、コロナ・パンデミック時に登園していた保育園児の園での様子を保育士が観察して保護者にあてて書いたコメントの質的分析を行い、その結果とコロナ前の同年齢の子どものものの分析結果とを比較して、コロナ・パンデミックが園児の生活や行動の変容に及ぼした影響について検証することを目的として行った。

2. 方法

神奈川大学と産官学連携研究事業を行っている保育所に通っている2歳児の、保護者と保育士が毎日やりとりをしている連絡用紙（日めくり形式）の、保育士がその日の子どもの園での活動や様子について観察して記載したコメント部分（テキスト・データ）の、2020年4月～6月の3か月分について、KH Coder⁴⁾を用いて質的分析を行った。当該園では、保護者による子どもの家庭での様子（機嫌や食事、睡眠、排泄、生活や行動など）に関する詳細な報告や、保育士による子どもの園での同じく健康や生活に関する報告を連絡用紙に記載してやり取りしているが、その用紙の原本を保護者が、写しを保育所が保管するのは2歳児までであるため（3歳以降は保育所での記録の保管は行わない）、調査対象は2歳児とし、かつ2020年4月～6月に登園していた園児3名の記録を分析対象とした（当該期間に数週間にわたって長期欠席（自宅待機）していた子どもたちは記録が無い場合、調査対象にはならなかった）。また、比較のためにコロナの影響が全く発生していなかった2018年の4月～6月の、当時2歳だった（2020年にも同保育所に在園していた：2歳児の記録が園に保管されている）3名の当時の記録（園での活動や様子について保育士が観察して連絡用紙に記載したコメント部分：テキスト・データ）の分析を行った。

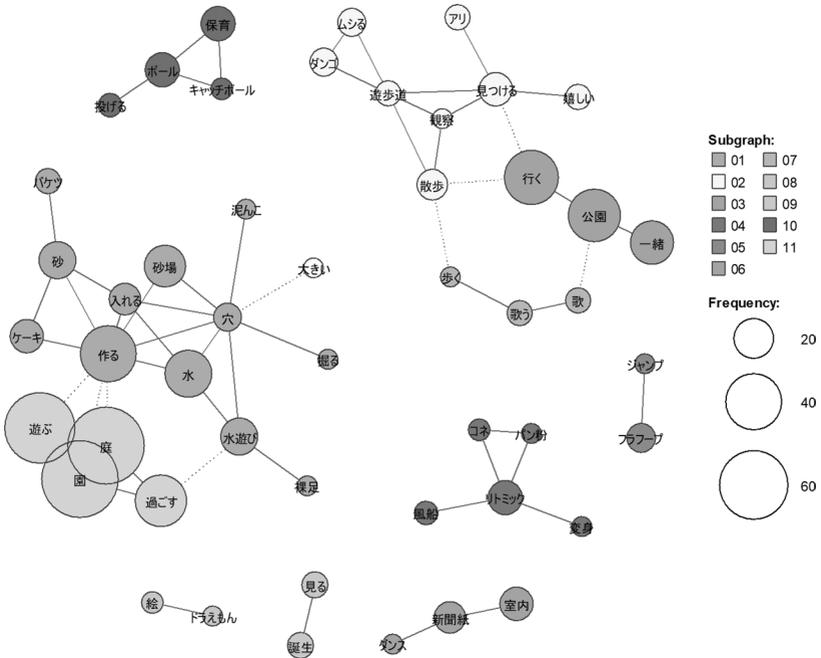


図2：2020年コロナ禍下の、園児の在園時の活動（共起ネットワーク分析）

を絵に描く、など、屋外と屋内・園外と園内での活動に連続性や関係性があり、またそれらの活動は保育士から促されたり勧められたものもあるが、子ども自身が自発的に、「やりたい」という気持ちから行っていた。

図2は、コロナ・パンデミック時の、2歳の園児の通常の保育所での生活や行動の保育士によるコメント記録（テキスト・データ）の質的分析結果である。

子どもの心身の健やかな育ちに外遊びは大切なので、コロナ・パンデミック時も、子どもたちは公園に行ったり遊歩道を歩いたりする機会を与えられていた。しかし、そこでの遊びや活動は、友達と一緒に元気に走り回ったりするのではなく、虫（アリやダンゴムシ）を見つけて観察したり、

狭い園舎（室内）では控えることが求められた歌を歌ってもいいよと許可されるといふものが中心であった。当該園には園庭はあるが非常に狭いので（保育所は幼稚園と異なり、近隣に公園などがあって活用できる環境にあれば、園庭は狭くても、あるいは無くてもよいとされている）⁵⁾、少人数で、園庭で砂遊びや水遊びをしたり、室内でフラフープやボールを使った遊び、リトミックやダンス等、園内でも体を動かして遊ぶ機会が持てるよう工夫がなされていた。しかし、それぞれの活動は単発で行われていて、連続性や関係性は見られなかった。また、多くの活動は保育士が計画・準備したものであった。さらに、運動量の不足を補うため、室内でできる身体活動としてリトミックなど指導された通りにやる活動が新たに切り入れられていたが、同時に、代替活動として、風船を使った遊びや変身などのごっこ遊び、パン粉をこねて遊ぶ、などが準備・提供されていた。

4. 考察

コロナ・パンデミック下でも、子どもたちが遊びを通して様々な経験をして学ぶことができるよう、元気に体を動かして遊ぶことができるよう、保育に工夫がなされていた。しかし、コロナ前とは異なり、コロナ・パンデミック時は、個々の遊びや活動が単発で行われていて連続性や関係性はなく、学びや経験の積み重ねはコロナ前のようにはできないようであった。また、当該園はコロナ前から、保育士が主導して行う活動が多い傾向にあったが（自由保育ではなかったが）、子ども自身が「やりたい」と思っで行う自主的・主体的も随所で見られた。しかしコロナ・パンデミック時は、感染予防の観点からの様々な制約から、保育活動においても、子どもたちの自由な遊びや活動は制限され、保育士が計画・準備した遊びや活動を保育士の指示に従って行うものになっていたと推察される。

就学後の学習の中心となる「認知スキル」に対し、幼児期は「非認知スキル」を育むことが重要で、その後の学力や生涯に渡る心身ともに健康的な生活を送る生きる力を高め、犯罪率の低下につながっていることが報告されているが⁶⁾、それらは幼児期の自由で主体的な活動によって最もよく育まれることが報告されている⁷⁾。2歳時に非認知スキルを育む保育に制限・制約があったとしても、その後の6歳になって卒園するまでの保育でリカバリーできていればよいのであるが、コロナ・パンデミックで変容した保育が、コロナが感染症分類5類（インフルエンザと同等）に引き下げられてからも続けられたため、子どもたちの非認知スキルの育ちに影響が及び続けることが懸念される。筆者らは、当該園の園児9名の、2022年（4歳時）と2023年（5歳時）の走力（25m走のタイム）を比較したところ、ほとんどの子どもが、4歳の11月時点に比べ5歳の5月の時点では走力が低下しており、5歳の11月時点でも走力はほとんど向上していなかった（図3）⁸⁾。この年齢の子どもは発育発達が著しく、半年・1年で通常は走力も大きく向上するのであるが、この子どもたちの体力・運動能力が低下・停滞してしまった背景には、コロナ・パンデミック時に、年長児では運動あそびや体を動かす遊びを行う時間が減って、学習ドリル（文字や数などの勉強）の時間が増えた、という保育内容の変容があった。そして、このような小学校での学習内容の先取りのような「お勉強」を保育所でやることを保護者も喜んでいたとのことであった。

コロナ・パンデミックの影響を保育園児も受けていたが、その影響は、公衆衛生的・社会的なものというよりは、保育者による保育内容の変容によるものであった。そして、遊びを通して人間関係や自主性、主体性などの非認知スキルを育む保育から、個別の活動が可能な与えられ指示される保育への変容を保護者も容認し、それが小学校の先取り学習のような内容の場合はむしろ歓迎していたことが、園児へのコロナ・パンデミックの負

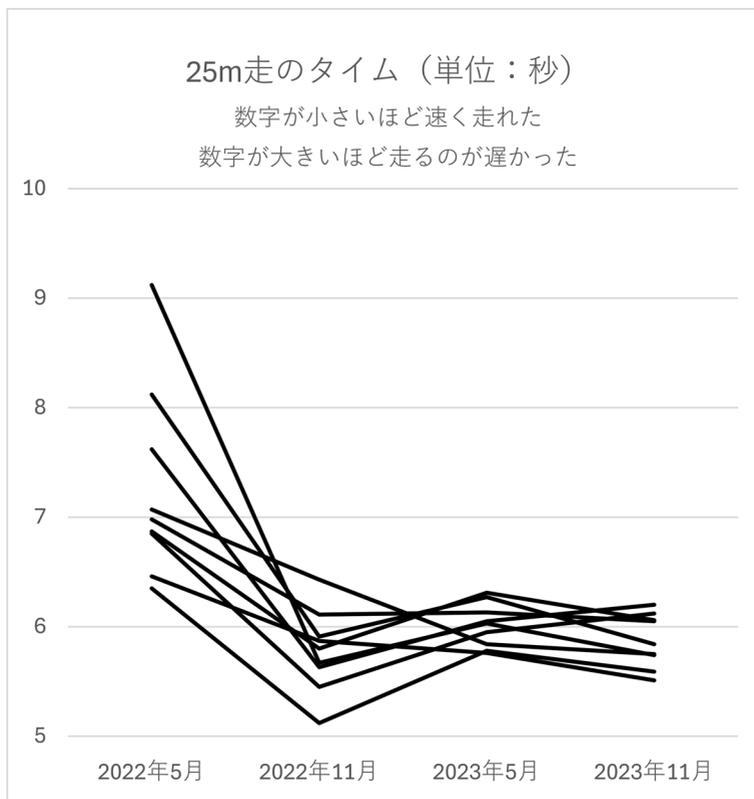


図3：コロナ・パンデミック時の保育内容の変化が園児の走力に及ぼした影響⁸⁾

の影響を決定し強めてしまったと推察される。

5. 謝辞

この研究は JSPS 科研費 23K02319 の助成を受けてまとめることができました。協力してくださったヒューマンスターチャイルド・白楽ナーサリー、藤井敬子氏（2018年当時、神奈川大学）、墨田雪香氏（神奈川大学）

に感謝いたします。

【参考文献】

1. 内閣府、世界経済の潮流 2020年I、第1章 新型コロナウイルス感染症下の世界経済、第1節 新型コロナウイルス感染拡大と政策対応、1概観（感染の発生及び拡大）、https://www5.cao.go.jp/j-j/sekai_chouryuu/sh20-01/s1_20_1_1.html
2. 文部科学省、新型コロナウイルス感染症対策のための小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校等における一斉臨時休業について（通知）https://www.mext.go.jp/content/202002228-mxt_kouhou01-000004520_1.pdf
3. 日本経済新聞 電子版 2020年6月16日、分散登校や短縮授業4割 公立小中、学びの質が課題に <https://www.nikkei.com/article/DGXMZO60428750W0A610C2MM8000/>
4. KH Corder：計量テキスト分析・テキストマイニングのための、<https://kxcoder.net/>
5. 厚生労働省、待機児童解消に向けた児童福祉施設最低基準に係る留意事項等について、https://www.mhlw.go.jp/web/t_doc?dataId=00tb5653&dataType=1&pageNo=1
6. Heckman J.J., Giving kids a fair chance, MIT Press, Cambridge, 2013.
7. Heckman J.J., Moon S. H., Pint R., Savellyev P., Yaviz A., The Rate of Return to the High/Scope Perry Preschool Program, J Public Econ, 94 (1-2), pp. 114-128, 2010.
8. 渡部かなえ、発育発達と健康社会学の観点から見た幼児の走動作の評価、人文研究 No. 214, pp. 1-10, 2025。